

# 小説「ペンギン・ハイウェイ」舞台探訪

## ガイドブック



### <森見登美彦さんの自作紹介>

～「ペンギン・ハイウェイ」は、わかりやすくいえば、郊外住宅地を舞台にして未知との遭遇を描こうとした小説です。スタニスワフ・レム「ソラリス」がたいへん好きなので、あの小説が美しく構築していたように、人間が理解できる領域と、人間に理解できない領域の境界線を描いてみようと思いました。郊外に生きる少年が全力を尽くして世界の果てに到達しようとする物語です。自分が幼かった頃に考えていた根源的な疑問や、欲望や夢を一つ残らず詰め込みました。～

### <このガイドブックのご紹介>

「ペンギン・ハイウェイ」は、**作者が育った生駒市北部のまちが舞台**。そこを探訪（「歩いて」＝「冒険して」訪れる）し、“ありきたり”のまちが、実は、この物語が描くように、みずみずしい少年少女の感性を育む“素敵”なまちであることを再発見するのが<小説「ペンギン・ハイウェイ」舞台探訪>です。この冊子は、そのガイドブックです。

このガイドブックの作成、~~それ~~を用いた「ペンギン・ハイウェイ」舞台探訪会は、2017年度の「生駒市市民活動団体支援制度」（愛称：マイサがいこま）の支援を得て実施されました。なお、舞台探訪会はイコマニア認定事業ともなりました。



### <3つの写真は、探訪路の一部>



「給水塔のある丘に続くコンクリートの階段」（文庫版 P.31）



「給水塔の裏から、森をぐねぐねと抜けていく小道」（同 P.33～34）



「長い階段が下へのびている。眼下には二車線道路」（同 P.35）

**発行（2017年10月）：大事なことは皆で考え決めよう会**

**お断り：このガイドブック掲載の作成者が撮影した生写真には著作権はありませんが、それ以外の地図・図版・イラスト・写真・新聞記事等には著作権がありますので、このガイドブック及びそこに掲載の地図・図版・イラスト・写真・新聞記事等は、個人で使用（楽しむ・参考にする等）だけにとどめていただくようお願いいたします。**



**舞台探訪路**

晴天コース  
雨天コース

トイレあり

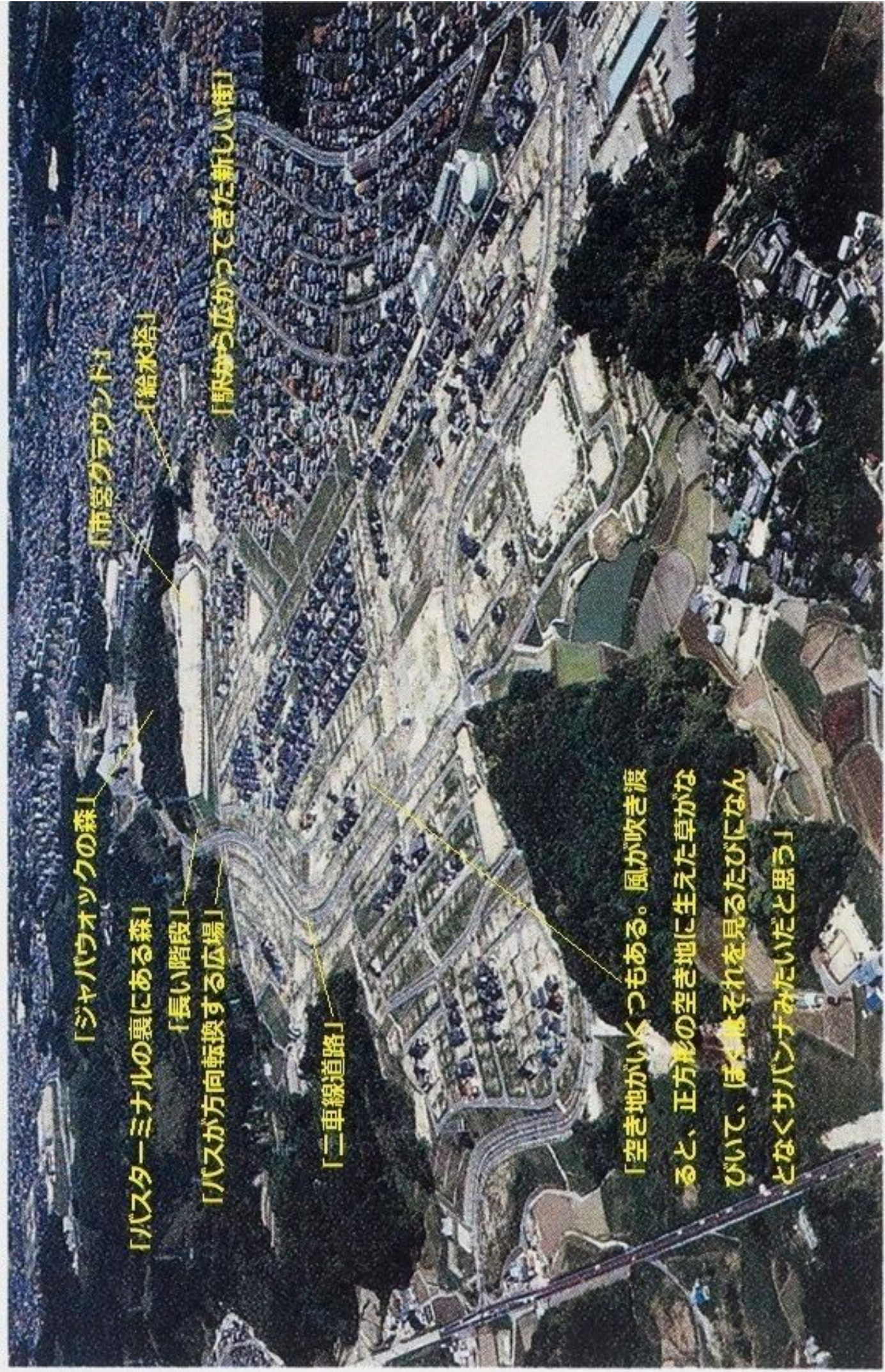
<地理院地図に加筆>



小説「ペンギン・ハイウェイ」の舞台のモデルである生駒市北部



- 手書きの ——— (新しい鉄道)(近鉄けいはんな線) 開業前からのバス通り
- 手書きの ——— (新しい鉄道)(近鉄けいはんな線) 開業と市道押熊真弓線のバス回転広場以東の開通に伴い設置されたバス路線
- 手書きの ——— (ケヤキ通り) ★「真弓坂/イザナ坂」(高台の新興住宅地と平地の歴史ある町とを結んでいる/坂とは、異なる2つの世界を結ぶもの)
- (高圧鉄塔 (現在は撤去されている))
- (中登美ヶ丘・二名町・松陽台。西登美ヶ丘より東は奈良市)
- ↓ (学園前駅)



「ジャバウォックの森」

「バスターミナルの裏にある森」

「長い階段」

「バスが方向転換する広場」

「二車線道路」

「市営グラウンド」

「給水塔」

「駅から広がってきた新しい街」

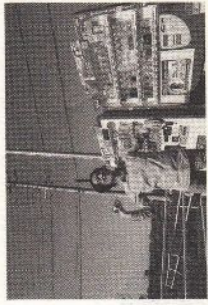
「空き地がいくつもあつた。風が吹き渡ると、正方形の空き地に生えた草がなびいて、ぼんぼんそれを見つめるたびになんとなくサバンナみたいだと思つた」

お、だ、い、お、酒、を、飲、み、な、が、ら  
今、回、の、特、集、を、振、り、返、り、て、み、ま、し、た

5月某日、特集最大のイベントである  
大江麻理子アナウンサーとの対談を終えた夜。  
興奮冷めやらぬ状態のまま、森見さんと編集者は夜の居酒屋で、  
特集と新刊『ペンギン・ハイウェイ』の取材に追われた  
この一ヶ月の話で盛り上がりました。



丘からの眺めを一望している森見さん。このとき感動していたのですね。(撮影 | 中岡隆造)



『ペンギン・ハイウェイ』の舞台となった町を歩く。「お姉さん」のマネをしてコーラを投げようとする森見さん。(撮影 | 中岡隆造)

**編集** 5月1日の奈良取材と撮影から始まった今回の特集、いかがでしたか？  
**森見** まずは、自分の特集を組んでもらえるということが、純粋にうれしいしありがたかったです。奈良はいい気分転換になりましたね。そのしわ寄せがきて、いま目の前の締切りが又々いのですが、それでも、奈良はよかったです。  
**編集** 一番のハイライトは？  
**森見** 今日(大江アナウンサーとの対談)は楽しかったです。もう青春ではないですが、なんだか

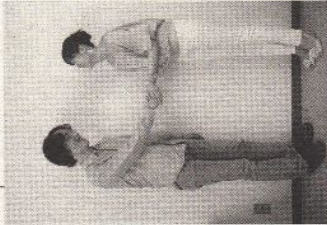
青春はい。大江さんとお話しているうちに、なんで「モヤモヤさまぁ〜ず2(以下「モヤさま」)」が好きなのかが自分でもわかってきて面白かったです。自分が小説を書くときっていつのは、この扉を開けたらどうなるだろうとか、路地を入たらどういふ感覚なんだろって想像しながら書くのですが、「モヤさま」はそこに実際に入っていくっていうところが面白かったんですね。今回の対談で話をしながらそのことに気づきました。たぶん、これまでで一番というくらいはともじや

べれた対談です。初めて本上まなみさんにお会いしたときはひどくたてずから。あのときは、会話が嫌になるくらい緊張していました。  
**編集** そうでした。傍から見ている、ほほえましぐらいでした。後ずさる姿とか。  
**森見** 後ずさった自分に自分で気づきましたから(笑)。あのときに比べると格段の進歩を遂げていますね。  
**編集** 奈良では、平城宮跡と生駒市高山竹林園での撮影、山の辺の道ハイキング、そして『ペンギン・ハイウェイ』の舞台となった町を歩きました。  
**森見** 山の辺の道もよかったです。竹林園では思っていた以上にリフレッシュできました。編集者と一緒に『ペンギン・ハイウェイ』の舞台となった自分が着た町を歩いたときには、なんともいえない不思議な気分になりました。子どもの頃のように市民球場に沿った細道を通って丘の上に立つたときは感動しましたね。その道がまだあるっていうのがうれしかったですし、丘から町を見下ろすと、昔自分が好きだった景色が広がっている。ああこれだった、って、久しぶりに帰ってきた感じがしました。  
**編集** ところで、この特集の最後は森見さんのエッセイで締めくくられるのですが、聞くところによるとエッセイを書くのはあまり得意でないとか。

**森見** 本当のことを書くのが苦手なんです。そうなんだとだんに硬くなってしまうという。まじめなことを書くと、「なにをまた生意気なことを」って、自分で思ってしまうんです。  
**編集** 楽しませたいという思いと、照れくささがあるんですかね。  
**森見** そう。面白い文章を書きたいと思っていて、それを目指していくと、嘘を書いたほうが断然面白くなる。ホラ小説は怖がらせるためのものなので、まじめに書く自分を許せるのですが、『太陽の塔』だって、最後のまじめな文章を書くのを自分に許すために前半部分を書いているようなものなんですから。  
**編集** ええと森見さん、最後にですね、新連載の開始宣言のようなものをしていただきたいかなんて思っているのですが。  
**森見** ……  
**編集** たとえば、「〇月号から始まるよ」とか「年内に始まるよ」とかですね(と、詰め寄る)。  
**森見** うかつなことはいいしますまい。

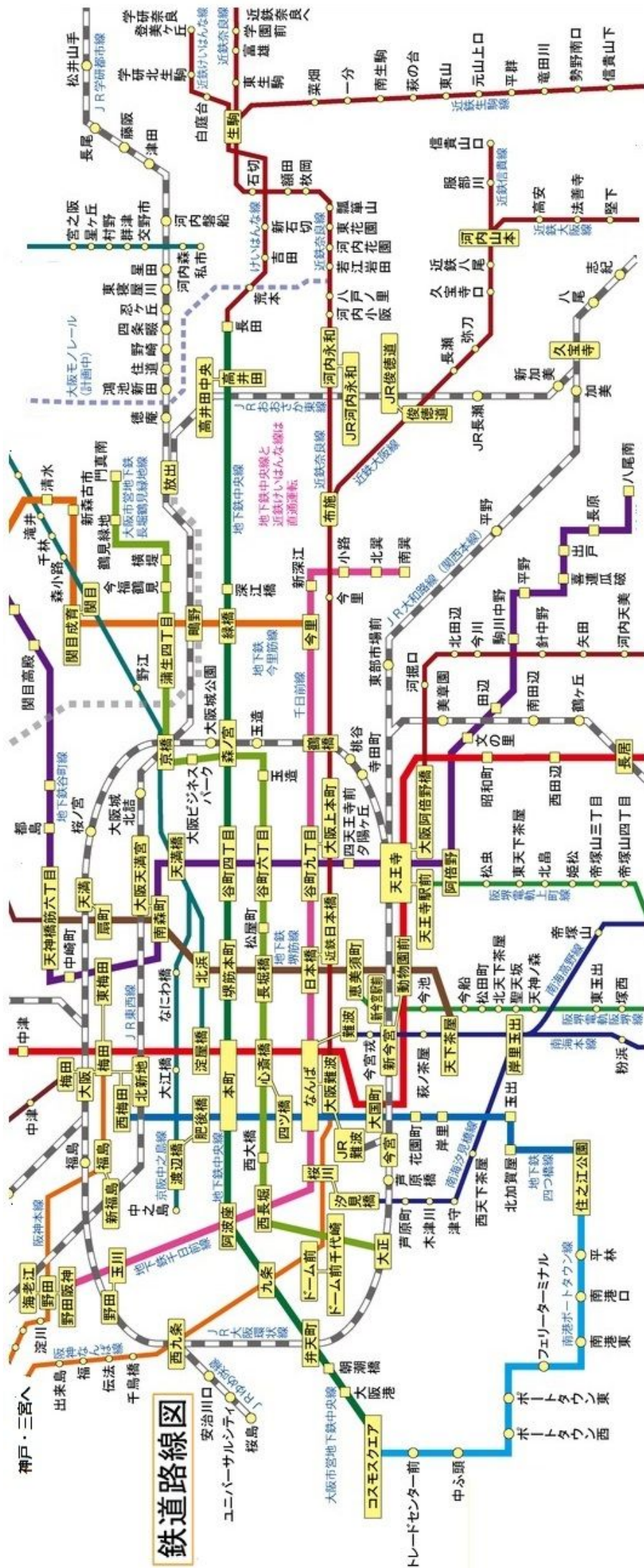


『ペンギン・ハイウェイ』の給水塔のモデル。(撮影 | 中岡隆造)



大江アナウンサーと対談後に握手。森見さん、照れまくりです。(撮影 | 遊谷高晴)

総力特集  
竹ノ本 登美彦  
森見 龍男



**鉄道路線図**

## 小説「ペンギン・ハイウェイ」の舞台

この文中、

- ・(P. )とあるのは、『ペンギン・ハイウェイ』(角川文庫版)のページを示します。
- ・“この住宅地”とあるのは、生駒市北部にある「北大和住宅地」のことです。

【1】『野生時代』(2010.7月号)の60~61ページ(P.5に掲載)と森見登美彦氏の講演(13.3.16/生駒図書館)での発言(下記)で**舞台のモデルだと確認できたもの・確認できるもの**

### <森見登美彦氏の講演での発言の概要>

- ・アオヤマくんと同じ小4の時、ペンギン・ハイウェイの舞台になった“郊外の住宅地”に引越してきた。
- ・小4の時、目の前で森が宅地造成されていく様子を見て、壁の向こう、つまり“世界のはて”を妄想する少年時代を過ごした。
- ・小4の頃から自販機めぐりが好きで、あちこち彷徨いながらジュースを買っていた。お姉さんがペンギンを出したコーラの自販機も、その頃からポツンと立っていた。
- ・「ペンギン・ハイウェイ」は、子どもの頃から、自分の過ごした住宅地をテーマにずっと書きたいと考えていたことが実現できた作品。
- ・講演に先だち、講演で対談した角川書店の編集者と2人で、ペンギン・ハイウェイの舞台になった給水塔・先端科学技術大学院大学・北大和・グランド・階段・自販機・ゲベックなどを巡ってきた。

### <探訪地①>

「給水塔」(初出 P.10) 「給水塔と大きなまるいタンク」(初出 P.31)

「大きなまるいタンク」とは、生駒市の**真弓配水場の配水池**<73(S48)年設置>のことで、  
「給水塔」とは、**それに連結された高架水槽**(正式名称は調整池)<76(S51)年設置>のことです。

### <説明>

①高架水槽は、「野生時代」(2010.7月号)の61ページ(P.5に掲載)の下部に北側から撮った写真が掲載されています。南側から撮った写真は「いぐいぐブログ・2」さんのHPに掲載されています。その写真を「いぐいぐブログ・2」さんのご承諾を得て右に掲載します。

②高架水槽は、当時開発された鹿ノ台住宅地(P.3に掲載の生駒市北部地図ご参照)に水を送るために設置されましたが、真弓浄水場<85(S60)年開設>(同地図ご参照)に鹿ノ台への送水ポンプが05(H17)年度に設置されるに伴い不要となり、13(H25)年度に撤去されてしまい、「**地球脱出船にみたくに見える**」(P.31)高架水槽は、跡地を残して残念ながら**今はもう見ることはできません**(右写真ご参照)。



「いぐいぐブログ・2」さんのHPより  
<右が「配水地」、左が「高架水槽」>



現在、高架水槽は撤去されている。



③配水池・高架水槽は自然流下によって配水するため、住宅地より高い場所に設置されます。そのため、真弓配水場は山田川・淀川水系と富雄川・大和川水系の分水嶺にあります。ここは生駒・奈良両市の境にあり、ごく近くには、奈良市の配水池も3つあります(いずれも高架水槽は付いていない)。なお、生駒市には、他に天野川・淀川水系と竜田(龍田)川・大和川水系があります。

### <探訪地②・③>

「住宅地の東には丘があって、そこにおおきな給水塔がある。丘の周辺にはまだ開発されていない森が広がっている。森のまわりはどこに抜けられるかわからない小道が縦横に走っていた。その一帯の地図を作ることは、ぼくらの重要な任務でもある。ぼくらは給水塔のある丘に続くコンクリートの階段を上っていった。……ぼくは丘から見渡せる街の様子をノートに記録することにした。」(P.31~32)

「給水塔のある丘に続くコンクリートの階段」は、実際は、給水塔の傍にある丘に続くコンクリートの階段(探訪地②)です(右写真ご参照)。

### <説明>

①「丘」とは、真弓塚のことで(探訪地③)。「コンクリートの階段」を上りきったところ<「野生時代」(2010.7月号)の60ページ(P.5に掲載)の右下の写真はここで撮影されたもの>から北東に20mほど離れたところに真弓塚の碑が建てられています。



給水塔を連結していた給水タンク

給水塔の傍にある丘に続くコンクリートの階段

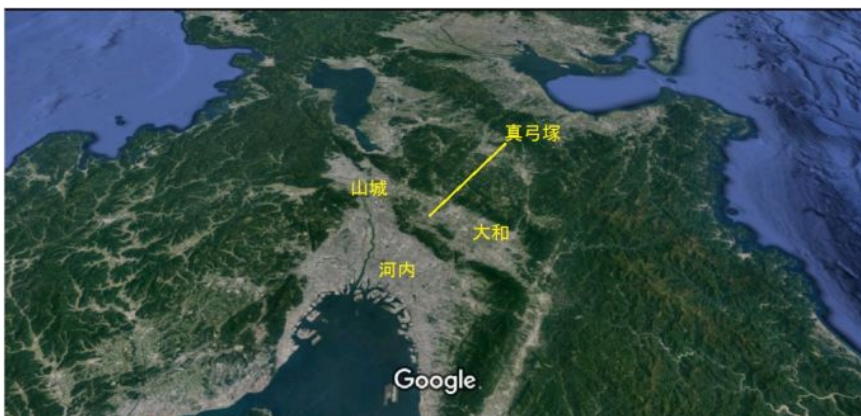
②民俗学・地名学の第一人者の故谷川健一さんは、その著『白鳥伝説』の中で、「真弓塚……は大和、河内、山城の境目にあり、河内からはじめて大和平野に進出した物部一族がこの真弓塚にのぼって日神ひのかみニギハヤヒを祀ったと想像していっこうに差し支えないところである。いま背後は樹林に蔽われているが、その樹林がないとすれば、三百六十度の視野をもつ円丘が真弓塚である。それはあたかも円墳のごとく、平野の中に孤立した小丘で、高さは二〇〇メートルに足りないが、大和平野を一望のもとに納め得る。物部一族は、真弓塚の天頂に太陽がかがやくとき、日神ニギハヤヒが彼らの前に現れるような気持ちを抱いたであろう。」と述べています。「野生時代」(2010.7月号)の60ページ(P.5に掲載)の右



給水塔の傍にある丘に続くコンクリートの階段

下の写真は、丘

からの眺めを一望している登美彦さんの写真ですが、登美彦さんがこの丘からの眺めを一望して感動したのもむべなるかなです。



#### <探訪地④>

「丘の周辺にはまだ開発されていない森が広がっている……給水塔の後ろは奥深い森である」(P.31)

「給水塔の裏から、森をぐねぐねと抜けていく小道は、……ふいにまた折れ曲がって、スタンドのある大きな市営グラウンドのネット裏をのびていた」(P.33~34)

「ぼくは〈ジャバウォックの森〉という名前をつけた」(P.118)

「モトハマさんは……林道へ入っていく。ぼくとウチダ君が五月に探検して、ペンギン・ハイウェイをたどった道だ。左手には市営グラウンドのフェンスが続いて、右手にはぼくがジャバウォックの森と命名した深い森が広がっている。」(P.126~127)

「ジャバウォックの森」は、北大和グラウンド・野球場の東側に広がる森林 (P.2に掲載の舞台探訪順路写真ご参照) のこと (探訪地④)。

「市営グラウンド」は北大和グラウンド・野球場のこと (探訪地④)。

北大和グラウンド・野球場の東側フェンス沿いの山道が「小道」「林道」「ペンギン・ハイウェイをたどった道」(探訪地④/右写真)。なお、この山道は、P.2に掲載の舞台探訪順路写真にある「丘に続く」

「階段」(南の階段)と「長い」「階段」(北の階段)を結んでいます(右写真は、南の階段側から北の階段側に向かって撮影されたもので、写っているフェンスは北大和グラウンド・野球場の東側フェンスとは別のフェンス)。

「野生時代」(2010.7月号)の61ページ(P.5に掲載)の左上には、北の階段から南の階段に向かって、この山道を進む登美彦さんの写真があります。



#### <説明>

①「野生時代」(2010.7月号)の61ページ(P.5に掲載)で登美彦さんは、「『ペンギン・ハイウェイ』の舞台となった)自分が育った町を歩いたときには、なんともいえない不思議な気分になりました。子どもの頃のように市民球場に沿った細道を(引用者:北から南へ)通って丘の上に立ったときは感動しましたね。その道がまだあるっていうのがうれしかったですし、丘から町を見下ろすと、昔自分が好きだった景色が広がっている。ああこれだった、って久しぶりに帰ってきた感じがしました。」と述べています。

②実は、登美彦さんが「まだあるっていうのがうれしかった」と述べた「市民球場に沿った細道」は「市民球場」と共に消滅する可能性があります。北大和グラウンド低炭素まちづくり計画があるからです。これは、市営の北大和スポーツ施設(グラウンド・野球場・体育館)のうち、グラウンド・野球場の土地を民間事業者に売却し、ここを市街化区域(現在は市街化調整区域)に変更した上で、ここに低炭素住宅地を建設しようという計画です。

この計画は、「ジャバウォックの森」のモデルとなった森(すでに市街化区域に編入され第1種中高層住居専用地域となっている)のマンション建設計画と、その東側(奈良市)の第1種中高層住居専用地域におけるマンション建設計画と一体となって行われる予定でしたが、15(H27)年12月、県が市に対し、北大和グラウンド・野球場の市街化区域への変更を認めないと通知したため、停止しています。そして、16(H28)年4月の熊本地震において、災害時には避難できる場所を確保するための広い空間が必要という

ことが再認識され、また、熊本地震では強い地震は火を使用しない時間に起こったので火災はあまり起きなかったが、広い空間は延焼火災時の避難場所としても是非必要ということも認識される中、避難所である北大和体育館に隣接する北大和グラウンド・野球場を住宅用地として売却する方針は、災害にかかる市民の安全・安心を確保する観点から見直すべきという意見が出されています。

#### <探訪地⑤>

「……やがて草の生いしげった平坦な荒地へ出た。高圧鉄塔が抜けるように青い空へそびえている。荒地の東は森に面している。」(P.35)

生駒市北部地図(P.3に掲載)で●で示した位置にあった高圧鉄塔がモデル。●●で示した位置にも高圧鉄塔があり、それらを高圧電線が結んでいましたが、●で示した位置にあった高圧鉄塔は2006年7月に撤去され、その西側に並んでいた、●●で示した位置にあった3基のそれも同年11~12月に、他のものも同時期に撤去されました。●で示した位置には、今は高圧鉄塔跡地だけが残っています。

#### <探訪地⑥・⑦>

「草をかき分けて北側へ行ってみると、コンクリートで舗装された急斜面になっていて、長い階段が下へのびている。眼下には二車線道路」(P.35)

「ぼくとウチダ君は風雨にさらされた長いコンクリートの階段を駆け下りた。」(P.38)



「二車線道路」は市道押熊真弓線(探訪地⑦)のことで、「長い階段」は、北大和グラウンド・野球場北側を走る市道押熊真弓線の沿道向こう側にある市営駐車場から、北大和グラウンド・野球場に最短で行けるようにと設置された階段(探訪地⑥)のこと(右の写真)。

#### <探訪地⑧・⑨>

「ぼくの家のある一角はバス路線の終着駅のそばで、駅から広がってきた新しい街の最前線にあたる」(P.6)

「眼下には二車線道路があって、その道を渡った向こうにはバスが方向転換する広場がある。そこがバス路線の終着駅で、つまりぼくらの街の果てだ」(P.35)

「ぼくはアスファルト道路の向かいにあるバスターミナルへ連行された。バスターミナルと言っても……隅に小さなプレハブの待合室と、コーラの自動販売機がぽつんとあるだけである。」(P.39)

「駅」は、近鉄奈良線学園前駅で、「バス路線の終着駅」は、学園前駅を始発とする奈良交通バスの北大和5丁目バス停(探訪地⑨)です。88(S63)年に、学園前駅~真弓一丁目間のバス路線が北大和五丁目

まで延長され、当時はここが終着駅でした。

「バスが方向転換する広場」＝「バスターミナル」は、北大和地区計画でいう“**地区施設（バス回転広場）**”のことです（**探訪地⑧**／右写真）が、そこは、実際は「バス路線の終着駅」（北大和5丁目バス停）ではなく、そこから少し東に行ったところにあります（P.3に掲載の生駒市北部地図ご参照）。また、実際は、バス回転広場には「待合室」はなく、「コーラの自動販売機がぽつんとあるだけ」です。



#### <説明>

①このバス回転広場は、“**北大和5丁目**”バス停が、**学園前駅を始発とする奈良交通バス路線の終着駅であった**ときには、バスがUターンできる空間として使用されていました。

②しかし、「**海まで行ける鉄道**」（P.69）「**新しい鉄道**」（P.100）の開業。つまり、06(H18)年3月27日の**近鉄けいはんな線**（近鉄奈良線生駒駅から学研奈良登美ヶ丘駅までの鉄道）の開業と市道押熊真弓線のバス回転広場以東の開通に伴いバス路線が拡張されると、“北大和5丁目”バス停は途中駅となり、終着駅（「**ぼくらの街の果て**」）ではなくなりました（P.3に掲載の生駒市北部地図ご参照）。そのため、このバス回転広場は使用目的がなくなりましたが、他用途への転換は北大和地区計画の変更を要するため行われることなく、今もなお「**自動販売機がぽつんとあるだけ**」（P.35）で、「**ぼくらの街の果て**」（P.35）、「**ペンギン作る・・・実験場**」（P.109～110）の面影を強く残しています。

③「野生時代」（2010.7月号）の60ページ（P.5に掲載）の右上に「自動販売機」の前でコーラの缶を投げるふりをする登美彦さんの写真があります。

#### <探訪地⑧>

「**バスターミナルの裏にある森**」（初出P.39）

**現在は登美ヶ丘車庫となっているが、かつてはオオタカが生息していた森**

①「**新しい鉄道**」（P.100）の建設に伴い、「バスターミナル」（実際は「バス回転広場」）の裏にあった森は消滅し、登美ヶ丘車庫となりました（P.3に掲載の生駒市北部地図ご参照）。登美ヶ丘車庫ができる前、「バスターミナルの裏」には深々とした森がありました（P.2に掲載の舞台探訪傾路写真の「バスターミナルの裏にある森」の名残ご参照／P.4に掲載のサバンナみたいだった頃のこの住宅地の写真の「バスターミナルの裏にある森」ご参照）。

②登美ヶ丘車庫は、西端は生駒市で、そこより東側は奈良市二名町にみょうちょうで、生駒・奈良両市にまたがっています。現在の登美ヶ丘車庫の東端から南東約300m付近にあった、生駒市北部地図（P.3に掲載）で●で示された鉄塔の近くのアカマツの木に、“二名町のタカ”と呼ばれていたオオタカの営巣地が

見つかりました。そのため、「京阪奈新線予定地にかかわるオオタカ等の保護に関する請願書」が00(H12)年8月に、奈良県・(新線建設主体の)生駒高速鉄道・生駒市・奈良市に提出されましたが、結局、このオオタカは生息域を確保できずにこの地を去りました。

③03(H15)年4月に学研高山地区第2工区(“第2工区”と略す/生駒市北部の、住宅都市整備公団～現UR～を主体に、288ヘクタールに及ぶ里山を大規模宅地へと開発する計画地)内でオオタカの営巣が確認されました(このタカは“二名町のタカ”が移動してきたものといわれました)。これを踏まえて、同9月に“第二工区内におけるオオタカの営巣地保全に関する要望書”が県と都市基盤整備公団(現UR)に提出され、これを受けて同12月、生駒市はオオタカ調査を実施すると発表。これにより、オオタカ調査が終了するまで、第2工区の開発(土地区画整理事業の施行手続き・道路建設)は停止することとなり、開発が停止している期間に、開発(自然環境破壊・財政破綻をもたらす大規模ニュータウン建設)に反対する意見が広まり、05(H17)年10月に、調査結果を踏まえてとりまとめられた“高山地区におけるオオタカ保全と開発との共生方法に関する提言”が開発主体の都市再生機構に提出されたものの、06(H18)年1月、開発反対派が市長選に勝利して第2工区の開発は頓挫しました。「**バスターミナルの裏にある森**」(P.39)を追われた“二名町のタカ”が、第2工区、つまり生駒市北部に広がる里山を守ったのでした。

④少し長々とオオタカの話をしました。その訳は、オオタカのお腹は白く、至近距離で飛んでいるところを見上げてみると、まるで**ペンギンが飛んでいるように見える**ことがあります(右写真ご参照)、登美彦さんは、“バス回転広場”の裏にあった森から飛び出てきたオオタカを至近距離でみたことがあって、「**ペンギンたちは……よちよち歩きながらバスターミナルの裏にある森へ入っていく。**」(P.114)とあるように、オオタカの森の出入りからペンギンの森の出入りという発想を得られたのではないだろうか、と思ったからです。



<オオタカ>  
出典：日本の野鳥識別図鑑  
(<https://zukan.com/jbirds/leaf48873>)

### <探訪地⑦→⑥→④の裏の⑤>

「お姉さんは怒って歩き出した。ぼくが実験道具をリュックにつめこんでいる間に、彼女は**市営グラウンドの裏のほうへのぼる階段**をずんずん上っていく。ぼくがあわてて**車道**を渡ろうとすると、彼女はあたりに響く大きな声で『指さし確認!』と叫んだ。ぼくは魔法にかけられたみたいに立ち止まった。ぼくが指差し確認をして車道をわたると、彼女はもう階段の上の方にいた。**長いコンクリートの階段**を上りきったところは**市営グラウンド**の裏で、植物の生いげった**荒地**が広がっている。ぼくとウチダ君がスズキ帝国と立派に戦ったところだ。**荒地の中には高圧鉄塔**がそびえている。荒地に接するようにして、薄暗い森がある。**給水塔のある丘から広がっている深い森**だ。この森を探検するのは危険だから、さすがのぼくとウチダ君もまだ地図を作れないままである。……『**ここは空き地**でしょう?』お姉さんがまわりを見ながら言った。『何を造るのかな?』『**新しい駅かも知れません**』」(P.67~69)

この場面でのアオヤマ君の行動ルートは、「車道」(二車線道路の**市道押熊真弓線**/探訪地⑦)→「階段」

(北大和グラウンドの裏のほうへのぼる階段／探訪地⑥) → 「市営グラウンド」(北大和グラウンド／探訪地④) 裏の「荒れ地」「空き地」(今は撤去された**高圧鉄塔の跡地**／探訪地⑤)。

なお、以前に高圧鉄塔がそびえていた空き地は、実際には「新しい駅」を「造る」ことができるような大きなものではなく、ごく小さな空き地でしかありません。

### <探訪地⑩>

「市営グラウンドの北にある水路……はバス通りの下をくぐるために十メートルほど**暗渠**になっていて、『トンネルくぐり』というスズキ君帝国の有名な刑罰に使われていた。雨がたくさん降ったときに水を流すための水路だから、ふだんは乾いていて、四つん這いになれば通ることができる。ぼくは一度、自主的に探検したことがある」(P.234~235)

実際は、「水路」は北大和グラウンドの西側に沿って走り、北大和グラウンドの北西角で**バス通りの下をくぐるために暗渠となっている**(右上に位置写真、右下に入り口写真)

### <説明>

①この水路は、宅地造成前に溪流だったところに、土にしみ込まない雨水を集めて山田川に流すために設置されました。

②結構急な水路であり、雨天で水が流れていたとき何らかのはずみで落ちれば流され、バス通りの下の暗渠に吸い込まれたのち、そのまま更に下流に奈落に落ちていくように山田川方面に向かって流されていけば命にかかわる危険がありました。そこで自治会は市に、人が流されても暗渠の入り口で止まるように、そこに頑丈な鉄製の格子を設置させました。これは上げ下げできるものですが、子どもの力ではなかなか持ち上げは難しい。これが設置されたのは93(H5)年ごろですが、子どもたちが暗渠に入っていたことは、当時の自治会は知りませんでした。それは、この小説の中での創作のように思いますが…?! (大人が知らなかっただけ?)。この暗渠は、水が流れていなくても入ることは大人でも恐ろしい(入ったことはありませんが多分)。なお、鉄製の格子は現在は、鍵の付いた鎖で固定されていて勝手に上げ下げできないようになっています。



「暗渠」の入り口

## ＜その他1＞

「規則正しく区切られた街には、まだ家が建っていない**空き地がいくつもある**。風が吹き渡ると、正方形の空き地に生えた草がなびいて、ぼくはそれを見るたびになんとなく**サバンナみたい**だと思う。」(P.6～7)

「ヒバリがかわいく鳴きながら、空高く上っていく。」(P.40)

「サバンナみたいだと思う」「街」とは、このガイドブックで“この住宅地”と表現している**北大和住宅地**のこと。「空き地がいくつもある」頃のこの住宅地では、「ヒバリがかわいく鳴きながら、空高く上っていく」光景は普通に見られました(P.4に掲載の、サバンナみたいだった頃、つまり「ヒバリ」が沢山住んでいた頃のこの住宅地の写真ご参照)。

## ＜説明＞

①手持ちの資料によれば、11(H23)年4月1日現在の北大和自治会の自治会世帯数は1132世帯。この住宅地の計画戸数は1330戸、計画人口は5320人。ほぼ全世帯が自治会に入会し、空き家もさほど多くないことを考慮すると、この時点<11(H23)年4月1日>で、まだ百数十の空き地がありました。この住宅地に入居が開始された88(S63)年12月からこの時点まで約22年間、毎年平均で約50戸が建てられ入居があったこととなります。なお、88(S63)年11月に109戸が一斉販売され翌月の88(S63)年12月に一斉入居がおこなわれたのが、この住宅地の街開きでした(このとき、登美彦さんは9歳11ヶ月)。

②登美彦さんは、「野生時代」(2010.7月号)のロングインタビューの中で「9歳の時<引用者：88(S63).1.6～89(S64).1.5>に家族で奈良県の郊外に引っ越したんです」と述べています。また、「ジブリの教科書12千と千尋の神隠し」(P.20～21に掲載)の中では「私が**大阪から奈良へ引っ越してきたのは、小学四年生<引用者：88(S63).4～89(H1).3>の夏だった**」と述べています。登美彦さんが奈良へ引っ越してきたのは「ぼく」と同じ4年生の88(S63)年の夏でした。この時、この住宅地は、4～5ヵ月後に街開きを控えたばかりで、まだ草の生えた空き地が見晴らす限り広がっていました。なお、登美彦さんが大阪から引っ越してきたのはこの住宅地の街開き前であったことわかるように、登美彦さんの引っ越してきた住宅地は、「**ぼくが7歳と九ヶ月の時**」(P.7)に「**県境の向こうにある街から引っ越してきた**」(P.7) **この住宅地ではありません**(この住宅地と同じ真弓小学校区の他の住宅地です)。

## ＜その他2＞

「**海まで行ける鉄道**」(P.69)

「今年になって、ぼくは**新しい鉄道**の話を聞いた。県境の山の向こうから鉄道がのびてきて、ぼくらの街に新しい駅ができるそう。まだ計画段階だからいつ完成するのは分からないと父は言った。」(P.100)

「なぜ『海辺のカフェ』なの?という人がいると、ぼくは**新しい鉄道**と海辺の街の話を。そして、理論上はこの街も海辺なのだと主張する。」(P.101～102)

「海まで行ける鉄道」「新しい鉄道」とは、<探訪地⑧・⑨>で述べたように**近鉄けいはんな線**のこと。

### <説明>

①「ぼく」と登美彦氏が同い年だとすると、「ぼくは新しい鉄道の話聞いた」のは88(S63)年4月から89(H元)年3月のことなので、「新しい鉄道」が完成するのは、それより16~17年後ということになります。

②「海まで行ける鉄道」が開通して、この住宅地の最寄駅の学研北生駒駅からは乗り換えなし四十数分で、大阪湾岸（大阪ベイエリア）方面に行くことができるようになりました。また、生駒駅で乗り換えるとそのまま神戸・三宮方面にも行くことができました。「**鉄道が来たら『海辺のカフェ』が本当の海辺のカフェになります**」(P.69)や「**鉄道がやってくれば、この街は海辺の街になり、そのカフェは海辺のカフェになるのだ**」(P.101)ということがけいはんな線の開通で実現したのです(P.6に掲載の鉄道路線図ご参照)。

### <その他3>

「**洋菓子店**」(初出P.122)

**ゲベック**がモデル。

### <その他4>

「ぼくらの街には**大学**があって、……その大学はぼくらがこの街に引っ越してきた頃に**できたばかりの大学**なので、まるで未来都市みたいな新しい建物がなっているそうだ。」(P.150)

「大学」「できたばかりの大学」とは、**奈良先端科学技術大学院大学**<93(H5)年4月に開講(法律上の開学は91年10月)>がモデル(P.3に掲載の生駒市北部地図ご参照)。

登美彦さんのブログに『ペンギン・ハイウェイ』には一つの大学が登場する。……これは「奈良先端科学技術大学院大学」という大学をイメージしている。>とあります。

### <その他5>

「**市バス**」(初出P.154) / 「**市バスがたくさん止まっている操作場**」(P.154)

「市バス」は、この住宅地では走っておらず、実際は**奈良交通バス**のこと。「操作場」は**奈良交通北大和営業所車庫**(P.3に掲載の生駒市北部地図ご参照)がモデルでしょう。

**[2] 作品の記述から、モデルが推察できるもの、モデルがあるとすればこれだといえるもの**

(1)「**海辺のカフェ**」(初出P.5)

⇒⇒**サンマルク**(この住宅地の隣まちの上町かみまちにあるベーカリーレストラン)

または**マダムエイジェイ**(以前、真弓2丁目バス停前にあったケーキ&カフェ)

○「おいしいパンのある喫茶店『**海辺のカフェ**』」(P.7)や

「父といっしょに『**海辺のカフェ**』へ朝食のパンを買いに行った。」(P.29)とあるので、



モデルはやはり、ベーカリーもやっているサンマルクでしょうか。

(2) 「**ショッピングセンター**」(初出P.7)

⇒⇒この住宅地の近隣には、この作品に出てくるような大きなショッピングセンターはありません。

(3) 「**宇宙ステーションみたいな歯科医院**」(P.7)

⇒⇒94(H6)～95(H7)年ごろ発行の地図では**山本歯科医院**。現在は、**ともだ歯科医院**。

○この医院は、この住宅地の隣まち(真弓)にあります(P.3に掲載の生駒市北部地図ご参照)。

(4) 「**小学校**まで通う。時間はおよそ二十二分かかる。」(初出P.8)

⇒⇒**生駒市立真弓小学校**

(5) 「**カモノハシ公園**」(初出P.9)

⇒⇒**四季の森公園**または**真弓中央公園**

(6) 「**ケヤキ並木**に沿って歩いていく」(P.9)

⇒⇒この住宅地内の**ケヤキ通り**(P.3に掲載の生駒市北部地図ご参照)。

○この住宅地には、バス道路が2つあります(市道押熊真弓線/市道真弓芝線)。バス道路にはもちろん歩道が付いていますが、バス道路ではないが歩道が付いている道路が3つあります(北大和1号線/同2号線/同3号線)。北大和3号線は東西に走り、街路樹はありません。北大和1・2号線にはケヤキの街路樹があります。これがケヤキ並木です。この住宅地を造った大林組がこのまちに最も相応しい街路樹にケヤキを選びました。北大和1号線は住宅地の中央部を、同2号線は住宅地の東部を、それぞれ南北に走っています(P.3に掲載の生駒市北部地図ご参照)。

(7) 「**カモノハシ公園のとなりにある小さな教会**」(初出P.29)

⇒⇒**四季の森公園の近くにある教会**がモデル候補ですが、

この教会は、94(H6)～95(H7)年ごろ発行の地図には未記載です。

○四季の森公園は池はありません。真弓中央公園は近くに教会はないが、大きな池がありアヒルとアイガモがいます。「カモノハシ公園」がいずれの公園をモデルとしているのか、モデルはないのかは判然としませんが、「カモノハシ公園には・・・運動器具が置いてある。」(P.63)ということで、運動器具が設置されている四季の森公園がモデルかも知れません。

(8) 「**学校のとなりに広がる草地**・・・

『ここは幼稚園を造る予定だったんだって』『でも、空き地のままだね』

『中止になったのかな。それとも他のものを造るのかな』(P.55～56)

⇒⇒生駒市立真弓小学校の南隣の**市立幼稚園建設予定地**だった空き地。

○市が、園児数の推移と3歳児保育の希望者の動向などを見極めながら検討を進めた結果、既存の施設の改修などで対応が可能のため幼稚園の新設は不要と判断して、この空き地を、市民に花と緑を育てる楽しみを知っていただく施設建設用地に転用活用することとし、01(H13)年度に**花のまちづくりセンタ**

一ふろーらむを開設しました。

(9)「電車は**二つの駅**に停まってから、県境の山を抜ける**トンネル**に入った。暗いトンネルは大変長い……ぼくらは**次の駅**で降りた。そこは一度もおりたことがない中州型の駅だ。」(P.104~105)

次の①と②の2つの解釈ができますが、

作品の記述とぴったりフィットするのは②の方です。

①⇒⇒「ぼくら」が乗り込んだ「電車」は**近鉄奈良線**。乗り込んだ駅は、**学園前駅**。「県境の山」は生駒山。「トンネル」は**新生駒トンネル**。「二つの駅」(実際は「三つの駅」)とは、**富雄駅・東生駒駅・生駒駅**、「次の駅」とは**石切駅**。<P.6に掲載の<鉄道路線図>ご参照>

～学園前駅から大阪方面に行く場合は、通常、富雄駅・東生駒駅・生駒駅・石切駅というように石切駅まで各駅に停車する準急や普通には乗らず、富雄駅・東生駒駅は通過し、生駒駅に停車したあとは、大阪市内の鶴橋駅までノンストップの快速急行に乗ります。準急に乗る場合は座って行きたいときに限られます。この小説では、準急に乗ったことになっている(普通はあまりに時間がかかり過ぎるので乗ったと考えにくい)のは、途中下車を余儀なくされたという舞台設定上、快速急行(学園前駅から生駒駅まで7分ノンストップ/生駒駅から鶴橋駅まで14分ノンストップ)より準急の方がよかったからでしょう。または、「ぼくら」はのんびり座って行きたかったためと思われる。～

②⇒⇒「ぼくら」が乗り込んだ「電車」は**近鉄奈良線**。乗り込んだ駅は、**富雄駅**。「県境の山」は生駒山。「トンネル」は**新生駒トンネル**。「二つの駅」とは、**東生駒駅・生駒駅**、「次の駅」とは**石切駅**。<P.6に掲載の<鉄道路線図>ご参照>

～この住宅地の隣まち(真弓)と富雄駅(学園前駅の西隣駅)を結ぶ富雄川沿いの県道を走るバス路線が、この小説が描く時期にはまだありました(現在は廃止されています)。従って、当時、この住宅地や真弓から大阪方面へ行くためには、近鉄奈良線の学園前駅と富雄駅のいずれかを利用するという2つ方法があったのですが、なぜか、「ぼくら」は、後者を選んだようです。～

(10)「**ぼくが散髪する店は……道路に面した壁がすべてガラスの変わった建物**」(P.136)  
⇒⇒**メンズカットハウスRENON**(真弓4丁目バス停前)がモデルでしょうか。**ワイズ登美ヶ丘店**(西登美が丘2丁目バス停交差点南西角)もモデル候補ですが、やや遠く、また、ペンギン・ハイウェイが書かれた頃には、まだこの店はなかったのでは。

(11)「霧にしずんだ道路の向こうから、**大きなシャトルバス**がゆっくり走ってきた。**ぼくらの街の果てにあるバス停**に、**空港へ行くバス**が走ってくることをぼくは不思議に思った。いつの日かこんなふうに乗って、宇宙へ出発する日がくるとしたらすてきなことだと考えた。」(P.309)

⇒⇒「ぼくらの街の果てにあるバス停」とは、当時終着駅であった**北大和5丁目バス停(探訪地⑨)**。「大きなシャトルバス」「空港へ行くバス」とは、生駒市北部・奈良市西部と関西国際空港(関空)とを結ぶ、奈良交通の**関西国際空港リムジンバス**のこと。同リムジンバスの路線は次のように変遷してきました(十分には調べることなく主に記憶に頼った記述につき確実なものではありません。)

①同リムジンバスは、開業当初は、**奈良交通北大和営業所車庫**（P.3に掲載の生駒市北部地図ご参照）を出てバス回転広場に移動、そこでUターンして北大和5丁目バス停に移動、**北大和5丁目バス停を始発にして**、北大和1丁目・近鉄学園前駅を経由して関空へ。

②**けいはんなプラザ**（関西文化学術研究都市の精華・西木津地区にある文化学術研究交流施設／京都府精華町光台1丁目）が開業<93(H5)>すると、同リムジンバスは、奈良交通北大和営業所車庫を出てけいはんなプラザに移動、そこを始発にして、近鉄学園前駅を経由して関空へ。一部は、奈良交通北大和営業所車庫前の**北大和1丁目バス停を始発にして**、北大和5丁目バス停を通ることなく、けいはんなプラザ・近鉄学園前駅を経由して関空へ（**北大和5丁目バス停は始発駅でなくなった**）。

③同リムジンバスの運行が北大和営業所から奈良交通**奈良営業所に移管**される<10(H22).3月>と、北大和1丁目バス停～けいはんなプラザ間のリムジンバス路線は廃止され、同リムジンバスの路線は、この住宅地からなくなりました。

### 【3】モデルになったのではないかと思われるもの

#### （1）「給水塔のそばにある**白いマンション**」（P.10）

⇒⇒真弓配水場のそばには、マンションはありませんが、モデルになるような小さなマンションかと思間違えそうになる大きな住宅（白くはありません）や県営の集合住宅があります（外壁は塗り替える前は白でした）。

（2）「学校のとなりに広がる草地には、水路がある……**ぼくらが深検する水路は**、東から西へ流れている。コンクリートで固められた水路の幅は約一メートルだ。水はぼくらの胸ぐらにある。」（P.55～56）

⇒⇒かつて「学校のとなりに広がる草地」であった花のまちづくりセンターふろーらむの東から東南の隣地は長弓寺の境内で、その南端部分を東から西へ流れ、幅は約一メートルで、水は晴れている日は底の方にしかない水路があります。この水路は、真弓配水場のある分水嶺の方向に向かって遡上していますが、途中で途絶えています。

（3）「国道だ。水路はその**国道の下のトンネル**をくぐって、向こう側へ抜けている。トンネルは真っ暗だったのでぼくらは用心しくぐったけれど、ちゃんと歩行者用の道が続いていたので安心だった。」（P.79～80）

⇒⇒「国道」は“国道163号”。この住宅地から国道163の向かい側の鹿畑町に抜ける車1台が通行できるほどの水路に沿った道があり、この道は国道163号に突き当たると、その下をくぐって鹿畑町に入ります（P.3に掲載の生駒市北部地図に“国道163号の下をくぐるトンネル”の表記あり）。

（4）「気がつくと、ぼくらはもう深い森を抜けて、広々とした青空の下に出ていた……草原だった……その草原はまわりを森に囲まれている。**ジャバウォックの森の奥にある忘れられた土地**なのだ。」（P.129）

⇒⇒航空写真（P.2に掲載の「舞台探訪順路」の写真）で見ると、「ジャバウォックの森」の東側に森の中の草原のような荒地があります。ここは行政区は奈良市ということもあって生駒市側の地元の人間も

入ることはもちろんどなたも知らない土地です。なお、その草原のような荒地を囲む森の一角に94(H6)～95(H7)年以降に、森が開かれて奈良市の配水池が建造されました(その位置は、P.2に掲載の「舞台探訪順路」の写真ご参照)。それに伴い、市道押熊真弓線から配水池までの未舗装一車線道路もつくられました。この道路は閉鎖され、配水池及び草原のような荒地を囲む森の周りには上部に複数の有刺鉄線が走るフェンスで囲まれており、「ジャバウォックの森」の東側一帯は現在も「暗黒(=分からない)」ゾーンとなっていますが、都市計画では、<探訪地④>で述べたように、第1種中高層住居専用地域となっています。

### 【あしがき】

この物語の舞台である、「駅から広がってきた新しい街」にある、「給水塔」、「丘に続くコンクリートの階段」、「長い階段」、その二つの階段を結ぶ「市営グラウンド」に沿った「小道」の東側に広がる「ジャバウォックの森」、「高圧鉄塔」、「二車線道路」、「ぼくらの街の果て」にして「ペンギン作る」「実験場」である「バスが方向転換する広場」、「バスターミナルの裏にある森」、「『トンネルくぐり』というスズキ君帝国の有名な刑罰に使われていた」「暗渠」等を実際に探訪する(歩いて=冒険して訪れる)ことで、**ペンギン・ハイウェイワールド**を体感できるのではないのでしょうか。

### 【ご参考】

(1) 森見登美彦さんの「ペンギン・ハイウェイ」と「千と千尋の神隠し」の舞台の共通点を延べた文章⇒「**ジブリの教科書12 千と千尋の神隠し**」(P.20～21に掲載)

(2) (1)の文章に説明を加えることで、「ペンギン・ハイウェイ」や「千と千尋の神隠し」の舞台となったところを明らかにしてみました⇒「**『ペンギン・ハイウェイ』や『千と千尋の神隠し』の舞台となったのはこんなところ**」(P.22～23に掲載)

(3) 森見登美彦さんは、「日本ファンタジーノベル大賞 2017 スタート記念座談会」(恩田陸×萩尾望都×森見登美彦/2017年某日)で、「ご自分が好む『不思議』というのは、具体的に作品としてありますか。」と質問されて、「**ペンギン・ハイウェイ**」の舞台となった町での**不思議体験**を次のように述べています。

～僕は小学校から中学校にかけては、以前『ペンギン・ハイウェイ』という小説で書いたように郊外の住宅地に住んでいました。そして住んでいる町のすぐそばに、世界の果てみたいな、自分の日常とは違う世界の入り口がどこかにあるっていうことを感じさせてくれるものが、僕にとっての「不思議」でした。そういう妄想を自分に起こしてくれるものをすごく求めていたふしがあります。小学校三年生か四年生ぐらいのとき、割に趣味のない子どもだったんで、毎日、自転車でウロウロ走ったりしながら、なんだか不思議な感じのする場所を探してはここはいいな、と思ってるっていう。妹とか弟とかに言わせると、あのときお兄ちゃんは一切何をしてるのか全然分からなかったと。友達と遊ぶわけでもなく、休みの日になるとフラッと出て行って、どこで何してるのかよく分からない。～

(4) 「ペンギン・ハイウェイ」の**書評**(P.26に掲載)

(5) 「**私たちのマイサポ登録事業へのご参加をお願いいたします!**」(最終ページに掲載)

## 完璧なトンネル、イメージの国

ナビゲーター 森見登美彦（作家）

<「ジブリの教科書12 千と千尋の神隠し」(文芸春秋) より>

空白期の出会い

(略)

完璧なトンネル

溜息が出るほど素晴らしいのは、この映画の始まりである。

映画は主人公の千尋が、両親といっしょに車に乗って、引越し先の町へやってくるところから始まる。道をまちがえた彼らは、森の奥で暗いトンネルを見つける。そのトンネルの向こうには不思議な町が広がっていた。

両親は無人の飲食店で勝手に食事をはじめ、呆れた千尋はひとり町をさまよう。やがて彼女は、湯屋の前にかかる橋の上でひとりの少年に出会う。「すぐ戻れ」と言われて引き返してみると、両親は豚の姿に変わっているではないか。あっという間に日が落ちて、町には夜の灯がともり、怪しい影が跳梁し始める――。

今でもこの映画を観はじめると、吸いこまれるようにトンネルの向こう側へ連れていかれる。あまりにも滑らかに描かれているから、観ている間は何かもが当然のように感じられるが、これこそ魔法というべきである。こんなにも強烈な吸引力をもって始まる映画を、私はほかに観たことがない。

まずタイトルが出るところでハッとしてしまう。

そこに描かれているのは高台にある新興住宅地である。千尋たちはその住宅地へ引越してきたらしい。丘陵を切り開いて造った住宅地で、「〇〇ヶ丘」などという名前がついているだろう。ぴかぴかした新築の家が整然とならんでいるだろう。

それは私の原風景というべきものである。

私が大阪から奈良へ引越してきたのは、小学四年生の夏だった。千尋よりも少し歳下ぐらいの頃合いであろうか。

大阪との景境にあるベッドタウン的な町で、かつては森や野原だった丘陵地帯に、「〇〇ヶ丘」と名のついた住宅地が広がっていた。やがて高校を卒業して京都の大学へ進学するまで、思春期的妄想力のピークにあたる時期をその町で過ごした。

高台から坂をくだれば川が流れて、その両側には田んぼが続き、昔ながらの農村風景が広がっていた。神武東征の折、九州からやってきた天皇を迎え撃ったという「ナガスネヒコ」の話を母から聞いたのも、そんな川沿いの風景を眺めながらのことである。自分たちは丘陵地帯に出現した歴史も何も無い住宅地に住んでいるのだが、すぐ隣には古事記的伝説につながる奈良の風景があった。

新興住宅地と古い町の境目には神社や寺があった。それはあたりまえのことで、かつて神社仏閣が背負うようにしていた丘陵の森を切り開いて造られたのが新興住宅地だったのである。新しい町と古い町の境目は急坂や小道が錯綜していて、思わぬところへ通じていた。

- ・高台には新興の住宅地がある。
- ・平地には歴史ある町がある。
- ・その中間には神社仏閣がある。

これは当時の私か身体でおぼえたシンプルな法則である。

「一本、下の道を来ちゃったんだな」

映画冒頭の父親の一言は、そのような位置関係を示している。平地の側からやってきた彼らは、高台の住宅地へのぼる手前で横道にそれてしまったのだ。そこは高台でもなく平地でもないところである。母親が道の脇に転がっているものを指して、「神様のおうちよ」とそっけなく言うように、そこは神社仏閣があるべき場所である。森の奥に不思議な世界への入り口があって当然といえる場所なのだ。

「不思議な世界への入り口は近所にある」

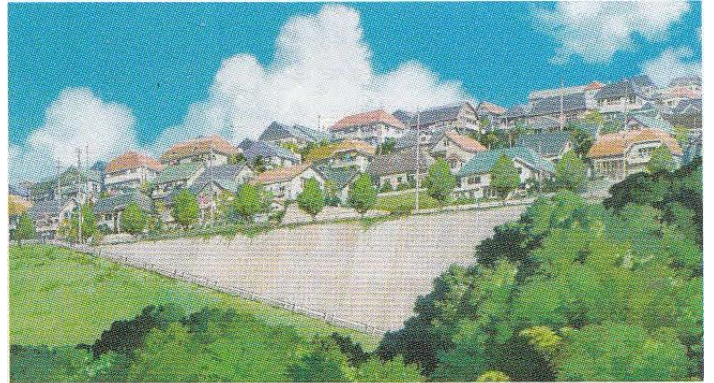
これこそ、子ども時代の私を支配していた感覚だった。

その感覚はその後私の中で膨らみつけ、ありのままの現実を受け入れることに抵抗させ、ついには私を小説家にしてしまった。

ここで思い出すのは父のことである。

子どもの頃、われわれはよくいっしょに「冒険」に出かけた。近所をぶらぶら散歩したり、車に乗ってドライブする。ときにはフェンスを乗り越えて森に入りこんだこともあるし、迷路のように狭い道に車を取り入れてしまっ立ち往生することもあった。そうした小冒険のたびに、私は「この道が不思議な世界へ通じていたら――」と想像を広げ、夢想家として着実にステップアップしていった。

あの頃から四半世紀が経ち、現在の父は、私か小説なんぞを書く夢想家に育ったことを嘆いているが、そもそも私か夢想家に育つタネをまいたのは父自身なのである。親というものは、いつ子どもを「教育」してしまうか分かったものではない。



千尋が引越してきた住宅地。  
私が子どもの頃暮らした町の雰囲気とそっくり。

父は方向音痴であり、私は夢想家である。ふたりともボンヤリしているから、森の中や知らない道を進んでいると、自分たちがどこにいるのか分からなくなる。萩原朔太郎の『猫町』に描かれているような方向感覚の喪失が起こる。その漠然とした不安と、異世界に接近しているような高揚感が、私はたまらなく好きだった。怖いけれども、父もいっしょだから大丈夫であろう、帰りたいような帰りたくないような……。

そうしてウロウロしていると、よく知っている場所に出るのがつねだった。遠くまで来たつもりが、そこは意外に近所なのである。それは嬉しい驚きでもあり、拍子抜けすることでもあった。

映画の中で、暗いトンネルを抜けた千尋たちは、窓から淡い光が射す待合室のような空間に出る。千尋たちは電車の音を聞き、「駅が近いのかもしれない」と安心する。その感覚は私にとってお馴染みのものであった。

自分たちは異世界に迷いこんだのではなく、もとの日常へ帰ってきたのだという感覚。「なーんだ」という感じ。父との小冒険が終わるとき、私か抱いた安心感によく似ている。しかし無事に家へ帰った父や私とはちがって、千尋たち親子はトンネルの向こう側へいってしまう。したがって、この場面で聞こえる電車の音には、相反する二つの意味がある。それは日常を喚起するものであると同時に、異世界の予兆でもあるのだ。

(中略)

さて、ここまで私は何を書いてきたのか。

この映画の始まりがいかにも素晴らしいかということである。

その完璧な冒頭には、新興住宅地と歴史ある町のはざまに存在する異世界への入り口がありありと描かれている。異世界に近く不安と高揚を、手で触れられるほど具体的に、あっけにとられるほど僅かな時間で書き切ることによってこの映画は始まる。

はじめて宮崎駿の映画に夢中になったのは、ちょうど奈良へ引越した頃であった。テレビで放送された『天空の城ラピュタ』を観て、こんなに面白いものを観たことがないと思ったのを覚えている。その後、『風の谷のナウシカ』をけじめとして、ほかの宮崎作品も次々と観ていった。

宮崎作品は「ファンタジー」と言われる。

しかし私には、千どもの頃からファンタジーについての頑固な個人的定義があって、宮崎作品をファンタジーだとは思わなかった。自分の家の近所に異世界への入り口があるという感覚、なにかの拍子に自分はそちらにいってしまうかもしれないという感覚、つまり神隠しが我が身に迫っているという感覚の再現だけが、私にとって意味があり、それこそ私のファンタジーなのである。

そういう観点で見れば、宮崎作品は遠い世界で繰り広げられる他の誰かの物語だった。『となりのトトロ』や『もののけ姫』にしても、「トトロがいた昔の日本」や「シン神がいた昔の日本」を舞台にしているのだから、自分の世界とは地続きではないという感じだった。したがって、私か個人的に定義するファンタジーではないのである。二〇〇一年の夏にいたるまで、私は宮崎駿作品を面白いと思いきず、自分の根源的な夢に響くものを期待してはいなかった。

そこに『千と千尋の神隠し』が現れたのである。

そのときはじめて、私は宮崎駿の映画に、自分が求めている完璧な「異世界への入り口」が出現するのを見た。千尋はかつての私だった。異世界へのトンネルは新興住宅地のすぐそばに、予想した通りの場所に存在していた。まるで父との冒険を、宮崎駿が背後で観察していたようである。私が見つめようとして見つけれなかったもの、予どもの頃から執着していた夢想、不思議なもの、ファンタジーが、この映画には克明に描かれていたのだ。

『千と千尋の神隠し』に衝撃をうけたのはそのためである。

## イメージの国

(略)

## 帰ってくるということ

この映画は、終わりもまた印象的である。

千尋がハクと手をつないで町を走りだしたとき、それまでの湯屋の賑やかさとは打って変わって、あたりは急にひっそりとする。その静けさがまざまざと夢を思わせる。そのときになって、千尋を通して自分が映画の中で経験してきたことが、一気に遠のいていく感じがする。夜ごと自分が夢からさめる過程のことはぜんぜん覚えていないが、きっとこんな感覚なのだろうと思える。

異世界に入っていく過程も素晴らしいが、こうして異世界を去る過程も素晴らしい。映画がまだ終わらないうちに、トンネルの向こう側の世界が夢いもの変わっていく。

かくして千尋は元の世界へ帰っていく。

それから彼女がどうなったのかは分からない。

さて、ここから先は私の妄想である。

私が子どもであった頃、じつは同じようなことがあったのだ。父といっしょに近所の森を歩きまわっているとき、千尋たちと同じようにトンネルを見つけた。「怒られたら謝ったらええんや」などと言う父といっしょに恐る恐るトンネルを抜けていくと、そこは不思議の町であった。

根性ナシの子どもであったから、千尋のように頑張れたとは思えないが。

豚にされてしまった父を救えるとも思えないが。

しかし父と私はきちんと帰ってきたという厳然たる事実から考えて、子どもの頃の私もまた千尋と同じように頑張ったにちがいない。幾多のピンチを乗り越えて、豚にされた父を救ったのである。そのことをまったく覚えていないのは、魔法によって記憶が失われているにすぎぬ。そう考えると、すべて合点がいく。なにゆえ私は子どもの頃から家の近所に異世界があるという感覚にとらわれていたのか、映画『千と千尋の神隠し』にあんなにも胸を打たれたのか。

その忘れてしまった思い出が、私を小説家にしたのだろう。

## 「ペンギン・ハイウェイ」や「千と千尋の神隠し」の舞台となったのはこんなところ

～以下は、「ペンギン・ハイウェイ」と「千と千尋の神隠し」の舞台の共通点を述べた

「ジブリの教科書 12 千と千尋の神隠し」(P.20～21 に掲載) の文の一部に強調や説明を加えたものです。～

<注：文中の地名の位置については、P. 3 に掲載の生駒市北部地図をご参照ください。>

そこ<説明：「千と千尋の神隠し」の始まりの部分>に描かれているのは高台にある新興住宅地である。千尋たちはその住宅地へ引っ越してきたらしい。丘陵を切り開いて造った住宅地で、「〇〇ヶ丘」などという名前がついているだろう。ぴかぴかした新築の家が整然とならんでいるだろう。

それは私の原風景というべきものである。

私が大阪から奈良へ引っ越してきたのは、小学四年生の夏だった。千尋よりも少し歳下ぐらいの頃合いであろうか。

大阪との県境にあるベッドタウン的な町で、かつては森や野原だった丘陵地帯に、「〇〇ヶ丘」と名のついた住宅地が広がっていた<説明：北大和～西登美ヶ丘にかけてひろがる住宅地のこと>。やがて高校を卒業して京都の大学へ進学するまで、思春期的妄想力のピークにあたる時期をその町で過ごした。

高台から坂をくだれば川が流れて、その両側には田んぼが続き、昔ながらの農村風景が広がっていた。神武東征の折、九州からやってきた天皇を迎え撃ったという「ナガスネヒコ」の話を母から聞いたのも、そんな川沿いの風景を眺めながらのことである。自分たちは丘陵地帯に出現した歴史も何もない住宅地に住んでいるのだが、すぐ隣には古事記的伝説につながる奈良の風景があった<説明：川は富雄川。「神武東征の折、(略)先祖が長髓彦ナガスネヒコに従って戦ったという伝承を信じ、それを誇りにしている人たちが現代もいる」(村井康彦『出雲と大和—古代国家の原像をたずねて』<岩波新書>より)。そんな大人からナガスネヒコ(別名は登美彦)の話を聞く機会があった、富雄川流域地域の子どもたちは、英雄としてナガスネヒコに憧れ、ナガスネヒコが活躍した地域が故郷であることに誇りを持っています。森見登美彦さんも、そんな子どもの一人だったのでペンネームを登美彦にしたのでしょう。富雄川は、昔、トミ(富・鳥見・登美・登弥・等彌・迹見などいろんな字が充てられてきた)と呼ばれた地域を流れたので「とみおがわ(鳥見小河・富小川)／とみのおがわ(登美の小河・富の小川)」と呼ばれていたのが、いつしか富雄川と呼ばれるようになりました。日本書紀では、長髓彦ながすねひこが内つ国うちづくに(生駒山地の東側)をわが国とっておき、古事記は、長髓彦のことを登美那賀須泥毘古とみのながすねひこ・登美毘古とみひこと表記していることから、生駒神話(P.24～25 に掲載の「生駒の神話」ご参照)の主人公である登美彦(長髓彦)の本拠地は富雄川流域のトミ地域(現在の生駒市上町から奈良市石木町にかけての地域)とされています。森見登美彦というペンネームは、本名の姓に、生駒の神話の主人公の名前(「ナガスネヒコ」の別名である「登美彦」)を合わせたものであることは、登美彦さんの精神形成に生駒の神話が少なからず影響を与えていることをうかがわせます。>。

新興住宅地と古い町の境目には神社や寺があった<説明：一言主ひとことぬし神社や長弓ちようきゆう寺・伊弉諾いざなぎ神社や天之忍穂耳あめのおしほみみ神社のこと>。それはあたりまえのことで、かつて神社仏閣が背負うようにしていた丘陵の森を切り開いて造られたのが新興住宅地だったのである<説明：丘陵の森の中には生き残るものもあります。小説「ペンギン・ハイウェイ」の舞台のモデルとなって、「ジャバウォックの森」という名で、この小説の主舞台(P.2 に掲載の舞台探訪順路写真ご参照)となった森のように。>。新しい町と古い町の境目は急坂や小道が錯綜していて、思わぬところへ通じていた<説明：小説家の森田季節さんはまさにそのような体験をされたようで、森田さんは自身のブログで次のように述べています。「……………今日、紹介するのは長弓寺です……………実は道に迷ったすえに山道みたいなところを歩いた

ら境内裏の墓地に出て、そこから進んだらいきなり本堂の真後ろに出てきてしまいました。ほとんど奇襲みたいな経路からたどりついてしまったことになります。……近鉄の学研北生駒駅。いかにも新興住宅地って感じの駅ですが、ここから15分も歩けば(道に迷わなければ)長弓寺の背後の墓地に着きます。……駅から歩いていくと、あからさまに新興住宅地です。そんなところから無理矢理山に入っていくと、お寺にたどりつきます。」なお、「ほとんど奇襲みたいな経路」「無理矢理山に入っていくと、お寺にたどりつきます」と述べておられるのが、後述の真弓坂・イザナギ坂のことです>。

- ・高台には新興の住宅地がある。
- ・平地には歴史ある町がある。
- ・その中間には神社仏閣がある。

これは当時の私が身体でおぼえたシンプルな法則である<説明 : P.3に掲載の生駒市北部地図の★で示された山中の坂は、高台の新興住宅地(真弓~北大和)と富雄川流域の平地の歴史ある町を結んでおり、坂の下部に長弓寺・伊弉諾神社があります/真弓側から小さな峠までの上りは真弓坂、富雄川側から小さな峠までの上りはイザナギ坂と呼ばれるのが相応しいでしょう。この坂の真弓側の入り口は、新興住宅地の一角にひっそりとあり、この坂の富雄川側からの入り口は、長弓寺本堂の脇を通る道の突き当たりにひっそりとあります/坂の中には、2つの異なる世界の境界(2つの異なる世界を結ぶもの)となっているものがあります。2つの異なる世界とは、あるときは、高台(新世界=新興住宅地)と平地(旧世界=歴史ある町)であり、あるときは、この世とあの世です。タモリさんは、プラタモリ「#69 京都・清水寺」(17.4.8)の中で、「坂っていうのは傾斜のある場所っていうだけでなくて境目っていう意味もある。(清水坂の場合は、)この世とあの世の境」と発言していました。>

<説明 : 航空写真(下写真ご参照)で見れば木々で覆われて見えないイザナギ坂・真弓坂という「木々のトンネル」は、平地(旧世界=歴史ある町)と高台(新世界=新興住宅地)という2つの異なる世界を結んでいます。「千と千尋の神隠し」において、坂道を登る途中で道に迷ったところにあったトンネルが、古い町と不思議な町という2つの異なる世界を結んでいたように。なお、先に述べたように小説家の森田季節さんは、その「木々のトンネル」ともいうべきイザナギ坂・真弓坂を「ほとんど奇襲みたいな経路」と記していました。>





## 生駒の神話

のちに即位して神武天皇となる**磐余彦尊**（いわれひこのみこと）が、航海と製塩の神である塩土の翁（しおつちのおじ）に聞くと「東の方によい土地があり、青い山が取り巻いている。その中へ天の磐舟（あめのいわふね）に乗って、とび降ふってきた者がある」とのことであった。そこで思った。「その土地は、大業をひろめ天下を治めるによいであろう。きっとこの国の中心地だろう。そのとび降ってきた者は、**饒速日命**（にぎはやひのみこと）というものであろう。そこに行って都をつくるにかぎる」と。

その年冬に、磐余彦（いわれひこ）は九州を出立して東征に向った。瀬戸内海を東に向かい、途中、安芸国（あきのくに）（現広島県）と吉備国（きびのくに）（現岡山県）に立ち寄り、春に浪速（なみはや）（現大阪）に着いた。

夏、磐余彦の軍たる皇軍は兵を整え、生駒山を越えて内つ国（うちつくに）（大和国（やまとのくに）のこと／現奈良県）に入ろうとした。そのときに**長髓彦**（ながすねひこ）（別名が**登美彦**（トミヒコ））がそれを聞き、「天神（てんじん）（天津神（あまつかみ）のこと／高天原（たかまがはら）＝天界に生まれた神のこと）の子がやってくるわけは、きっとわが国を奪おうとするのだらう」といって、軍を率いて孔舎衛坂（くさゑのさか）（生駒山西麓／現東大阪市日下（ひげさか））で戦った。矢が、磐余彦の兄である五瀬命（いつせのみこと）のひじとすねに当たった。**皇軍は進むことができなかった**。磐余彦は考えた。「日に向って敵を討つのは、天道（てんとう）（太陽）に逆らっている。一度退去して弱そうに見せ、背中に太陽を負い、日神（ひのかみ）（太陽神）の威光をかりて、敵に襲いかかるのがよいだろう。このようにすれば**刃に血ぬらずして**、敵はきっと敗れるだろう」。そこで軍中に告げていった。「いったん停止。ここから進むな」と。そして**軍兵を引いた**。長髓彦の軍も**あえて後を追わなかった**。

その後、皇軍は、紀伊半島を迂回、熊野付近で上陸し、紀伊半島を縦断して大和国に入り、冬、再び長髓彦の軍と相見（あいまみ）えた。しかし、戦いを重ねたが仲々勝つことができなかった。そのとき急に空が暗くなってきて、雹（ひょう）が降ってきた。そこへ**金色の不思議な鵄**（トビ）が飛んできて、磐余彦の弓の先にとまった。その鵄は光り輝いて、そのさまは雷光のようであった。このため、長髓彦の軍勢は**皆眩惑されて力戦できなかった**。

そこで、**長髓彦は使いを送って、磐余彦に言った**。「昔、天神の御子が、天磐船に乗って天降られた。饒速日命（にぎはやひのみこと）という。この人が我が妹の**三炊屋媛**（みかしきやひめ）を娶めとって子ができた。名を**可美真手命**（うましまでのみこと）という。それで、手前は、饒速日命を君として仕えている。一体天神の子は二人おられるのか。どうしてまた天神の子と名乗って、人の土地を奪おうとするのか。」と。

磐余彦がいった。「天神の子は多くいる。」と。

饒速日は、もとより天神が深く心配されるのは天孫（てんそん）（天神の子孫）のことだけであることを知っており、また、天神と人とは全く異なるのだということを長髓彦に教えても分りそうもないことを見てこれを殺害し、**部下達を率いて帰順した**。

### <解説>

(1) 生駒の神話は、青太字の部分を見ればわかるように、次のごとく**非戦・避戦の精神**に貫かれています。

① 1回目に磐余彦と長髓彦が相見えたとき、磐余彦の兄が矢で怪我をただけで磐余彦軍は戦わなかった。通常の神話＝好戦神話であれば、のちの天皇の兄が侮辱されたことをもって磐余彦軍（皇軍）は奮い立ったとなつたはずですが。

② 2回目に磐余彦と長髓彦が相見えたとき、遠路はるばる迂回して来て疲弊している磐余彦軍を、万全の体勢で迎え撃つことになった長髓彦軍は、簡単に殲滅できたのにそれをやらず、皇軍は戦いを重ね

した。殺戮（食べるためではなく生命を奪うこと）することを知らなかった縄文人の長髓彦軍は、殺すことなく磐余彦軍（外からやってきた軍隊）を撃退せんとして戦いが長引きました。通常の神話＝好戦神話であれば、どちらかの軍隊が劇的勝利をおさめたとなつたはずですが。

③『生駒市誌』では、「**金色の鴉は、本来は長髓彦（また登美彦）の側のトーテム（神）**ではなかったか。**登美彦の登美（トミ・トビ）は、鴉（トビ）と通ずる**ようである。」と記述されています。つまり、金色の不思議な鴉トビは、「トビ＝トミ」地域の守護神、登美トミ彦は、「トビ＝トミ」地域の彦（優れた男子）であり、従って、金色の不思議な鴉は登美彦（長髓彦）の守護神です。その**守護神が長髓彦軍の戦いを止めたのはなぜでしょうか**。戦いが長引くなかで、ついに長髓彦軍が磐余彦軍を殺戮により撃退することに転じようとしたとき、守護神は長髓彦軍が墮落（生命を侮辱するものに堕ちてしまうこと）してしまうことから守護するためでした。

④長髓彦は磐余彦に使いを送って争いを解決するため話し合いをしました。その結果、一旦は殺戮で争いを解決せんとした長髓彦は身を引き（神話では殺されたと表現）、饒速日は磐余彦に「帰順した＝国を譲った」のです。

(2) (1) のように生駒の神話は、通常の神話＝好戦神話とは違って「華々しい戦い」のない、**戦い忌避神話**です。なお、生駒の神話は、「**長髓彦物語**」「**生駒の国譲り神話**」とも言えます。

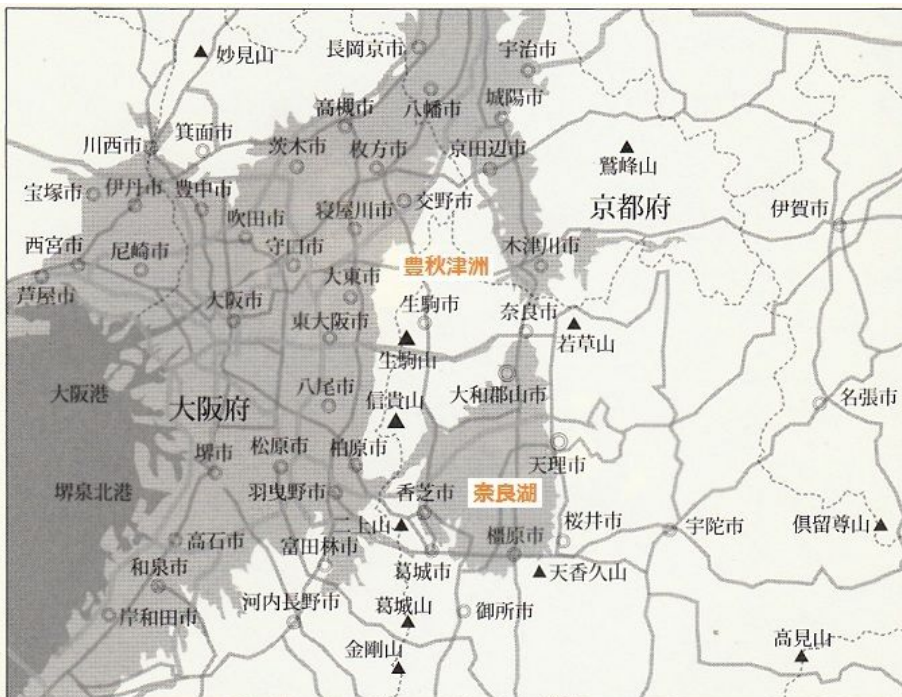
(3) 生駒の神話が生まれたころ、生駒は「**豊秋津洲とよあきつづしま**」と呼ばれる島に近い半島でした。

～下記の文は、嶋恵「古代の地形から『記紀』の謎を解く」より～

……記紀は「国生み神話」で、弥生人が先住の縄文人から奪って自分達のものとしていった土地（国）を「イザナギ・イザナミが子を産んだ」と表現しているのです。……「国生み」の豊秋津洲とは大和のことでも本州のことでも日本全体のこともないのです。古代には今より海面が高く、河内平野・

奈良盆地・京都盆地は一続きの海であり、琵琶湖に繋がってましたから、豊秋津洲とは、西日本のどこかで、当時は周りを海に囲まれた島か半島状だった所のはずです。次ページの地図

（引用者：左に加筆して記載）は、山辺やまへの道や葛城古道、縄文の遺跡や古墳が標高一〇〇m以上のところに密集していることから、当時の海面は現在より六〇m高かったと仮定した場合のもので、生駒市はほぼ島に近い半島になっています。神武の東征軍は、この生駒山西麓の草香（日下）からヤマトへ攻め入ろうとしてナガスネビコの軍に撃退されたのです。またこの日下は遺跡の集中地帯であり、東に山越えて大和に至る直越なおごえの起点でもあります。河内の海に面した陸海の交通の要衝であり、縄文時代以前から多くの人が住んでいたこの半島が、豊秋津洲でしょう。



海面が+60m だった頃の生駒市

神武の東征軍は、この生駒山西麓の草香（日下）からヤマトへ攻め入ろうとしてナガスネビコの軍に撃退されたのです。またこの日下は遺跡の集中地帯であり、東に山越えて大和に至る直越なおごえの起点でもあります。河内の海に面した陸海の交通の要衝であり、縄文時代以前から多くの人が住んでいたこの半島が、豊秋津洲でしょう。

## 書評『ペンギン・ハイウェイ』〈著〉森見登美彦

評・田中貴子（甲南大学教授・日本文学）

### ■未知なるものに分け入る少年

郊外に住む小学4年生の「ぼく」は、まだ海を見たことがない。なのに、街には突然ペンギンが出没する。どうやら歯科医院の「お姉さん」がその現象にかかわっているらしい……。

京都も大学生も出てこない本書は著者の「新境地」と評されているが、それは当たらない。著者のこれまでの小説は京都の実体を描いたわけではなく、著者の作り出した「世界」がたまたま京都だったにすぎないからだ。今回も、たとえモデルになる場所があったとしても、著者が郊外という「世界」を作り上げたのだといえよう。

少年はその街で不思議な現象に遭遇し、その謎について研究する。それは、死、とか、世界の果て、といった未知なるものを探検することであり、彼の成長を瑞々（みずみず）しく、またせつなく語るエピソードとなっている。

郊外には未開発の森が残っており、それがまず、少年の未知なるものとして登場する。この森はいずれ同じような住宅地になるのだろうが、まだ謎をはらむ場所として立ちはだかる。

この「異界」としての森と住宅地の境界にある白いマンションに、少年の謎の最たるものである「お姉さん」が住んでいることは示唆的だ。『四畳半神話大系』にも歯科医院の「羽貫さん」という不思議な女性が出て来たが、「お姉さん」は未知なるものと既知なるものをつなぐ存在なのだと思う。

整然と区画整理された郊外の街や、チェス盤、玩具のレゴのような四角い物のイメージが頻出するが、それは彼の日常世界の象徴である。ところが、彼の前には「お姉さん」の「おっばい」に代表されるような丸い物（「海」や「幽霊の月」など）が次々と出現し、彼はそれによって未知なるものの存在に触れてゆくのである。

印象に残ったのは、「お姉さん」がカンブリア紀の海辺で石を抱いている夢や、少年がその寝顔を眺める場面だ。著者が影響を受けたというスタニスワフ・レムの『ソラリスの陽（ひ）のもとに』に思いを馳（は）せた。

ペンギン・ハイウェイ。それは、少年が大人になる道なのだ。

[朝日新聞 2010年7月18日]

評・小谷真理（ファンタジー評論家）

### ■天才少年の躍動感あふれる日々

才能豊かな人が活躍できる世界は案外少ない。よって通常のは、自尊心とはにかみを同居させながら、おもしろおかしい青春を送るのが常らしい。そう実感させるのが、ユーモアとペースに満ちた独特の青春小説で知られる、この作者だ。今回は何と小学校4年生の男子が主人公。父母と妹から成る典型的な郊外家族を描かせても、やはり一筋縄ではいかない。才能あふれる少年は、生意気ながら可愛（かわい）らしさ満点のキャラで、ついつい笑ってしまう。

はたして平凡な郊外の町に、南極にいるべきペンギンが出現し、さらには未確認飛行物体やらドラゴンやら、非日常的な超常現象がつぎつぎと起り、少年は懸命に観察記録をつけながら事件解明に明け暮れる。その躍動感あふれる日々の楽しいこと。

昨今「郊外を生きる平々凡々な少年」が新聞や論壇で問題にされるのは、社会的な暗黒面を背負った事件とのからみが多い。しかし著者は彼らの世界に、衝撃的で取り返しのつかない事件は持ち込まない。ロマンチックで陽気な解釈を提示し、甘酸っぱい初恋の香りとともに、不思議な活力を与えてくれるのだ。

[日本経済新聞（夕刊）2010年6月16日]

# 私たちのマイサポ登録事業へのご参加をお願いいたします！

## 大事なことは皆で考え決めよう会

＜森見登美彦さんの自作紹介＞

～「ペンギン・ハイウェイ」は、わかりやすくいえば、郊外住宅地を舞台にして未知との遭遇を描こうとした小説です。スタニスワフ・レム「ソラリス」がたいへん好きなので、あの小説が美しく構築していたように、人間が理解できる領域と、人間に理解できない領域の境界線を描いてみようと思いました。郊外に生きる少年が全力を尽くして世界の果てに到達しようとする物語です。自分が幼かった頃に考えていた根源的な疑問や、欲望や夢を一つ残らず詰め込みました。～



「ペンギン・ハイウェイ」は、作者が育った生駒市北部のまちが舞台。そこを探訪（「歩いて」＝「冒険して」訪れる）し、“ありきたり”のまちが、実は、この物語が描くように、みずみずしい少年少女の感性を育む“素敵な”まちであることを再発見する**舞台探訪会をマイサポ事業として今秋実施します。**

【1】私たちの今年度のマイサポ事業は次の通りです。

- ~~(1) 小説「ペンギン・ハイウェイ」の舞台探訪の「ガイドブック」を作成。~~
- (2) **舞台探訪会実施**：「ガイドブック」を手に、物語の舞台を巡って歩き、観察し、小説の登場人物の心情を体感。（この探訪会は、イコマニア・イベントに認定されています。）
- (3) 探訪会参加者の感想等を取りまとめて、~~付録として「ガイドブック」に添える。~~
- ~~(4) 付録付きの「ガイドブック」を希望者に配布。~~



お断り：このガイドブック記載の地図・新聞記事等に著作権をクリア出来ていないものがあるとの指摘をいただきましたので、このガイドブックの作成・公的配布はマイサポ事業から削除いたしました。

【2】ご参加の御願い

小説「ペンギン・ハイウェイ」舞台探訪会を下記のように実施いたします。是非ご参加ください。

\*\*\*\*\*小説「ペンギン・ハイウェイ」舞台探訪会\*\*\*\*\*

と き：10月21日（土）・10月28日（土）、両日とも、午前10時出発、午後0時解散

ところ：北コミュニティーセンター（21日はセミナー室301に、28日は同201に集合）

／午前9時半より受付開始 <ご注意・お詫び：21日（総選挙投票日前日）の集合場所は、

総選挙の準備に伴いセミナー室201から同301に変更となりました。>

内 容：生駒育ちの小説家である森見登美彦さんの作品「ペンギン・ハイウェイ」の舞台を探訪。

雨天時：一部コース変更して実施

その他：探訪終了後、簡単な感想文をお書きいただくようお願いする予定ですので、筆記具をご持参ください。

<3つの写真は、探訪路の一部>



「給水塔のある丘に続くコンクリートの階段」（文庫版 P.31）



「給水塔の裏から、森をぐねぐねと抜けていく小道」（同 P.33～34）



「長い階段が下へのびている。眼下には二車線道路」（同 P.35）

問い合わせ先：大事なことは皆で考え決めよう会 吉波伸治（TEL 0743-84-4355）／HP：「大事皆で決めよう」で検索